シンポジウム

〈行動としての舞踊〉について

板谷　徹

1　舞踊における〈動き〉と〈身ぶり〉

今日の私のテーマとした〈行動としての舞踊〉という概念は，この数年来私が試みている，民俗ーフォークロアのなかの舞踊，つまり祭りで行われる舞踊を〈動き〉のレヴェルで捉えようとする時に直面したいくつかの問題に発している。一言でいえば，祭りのなかで行われる舞踊が，例えば能や歌舞伎舞踊などと同じ方法で捉えることができるのだろうかという問題である。

この２つの種類の舞踊に，とりあえず，民俗における舞踊には〈行動としての舞踊〉，もっぱら鑑賞の対象となる舞台の舞踊には〈表現としての舞踊〉という概念を提案しておきたい。つまり，〈動き〉の質とか舞踊という行為のなかで果たしている〈動き〉の機能を，一方は〈行動〉として，他方は〈表現〉として捉えるということである。

ここでは舞踊における〈動き〉が問題となるが，その〈動き〉なるものをまず吟味しておく必要がある。

〈行動としての舞踊〉にあっても〈表現としての舞踊〉にあっても，舞踊という行為のひとつの要素である〈動き〉だけを取り出してしまうと，舞踊という行為の全体を見失うおそれがある。その意味では〈動き〉よりもむしろ〈身ぶり〉という言葉の方が適当かもしれない。〈身ぶり〉という言葉で，舞踊という行為の全体を捉えた上で，そのある側面を考える時に〈動き〉という言葉を使った方が舞踊という行為の構造が見えてくる。

哲学の市川浩は『〈身〉の構造』で，身体論を展開して，「具体的な生きられる身体」すなわち〈身〉とその〈身〉が関わり合う世界との関係を〈身分け〉という言葉で捉える。〈身〉が分けるとは，感覚を通して〈身〉を取り囲む世界を分節して自己にとっての世界を組織化するとともに，抽象的な時空にあるわけではないその〈身〉はその〈身〉が存在する世界によって分節され，組織化されている。

こうした考え方は，舞踊における〈動き〉と〈動き〉を創り出す踊り手の身体との関係のなかで，〈動き〉を考えるためには有効に働くのではないかと思われる。

〈身ぶり〉という言葉には，まず〈身ぶり〉の起こされる場ートポスとしての〈身〉が示され，〈身〉を振る，あるいは振り起こすという，〈身〉の世界への働きかけが，「身を動かして感情・意思などを表す」（『広辞苑』）という能動性として示されている。しかも〈身ぶり〉は世界への働きかけという能動性だけでなく，他者の視線にさらされた〈身〉のあり方，〈身〉の存在する世界によって規定される〈身〉の，受動的なあり方が，「身のなりふり。身なり。」（同）という言葉の意味に同時に捉えられている。

これを舞踊の場に展開すれば，〈身ぶり〉という言葉によって，舞踊における踊り手の身体ー〈身〉とその〈身ぶり〉が関与し，あるいは創り出す世界との関係の構造が捉えられる。市川浩のいう〈見分け〉が世界を分節し，世界に〈身〉が分節されるという概念であったと同時に，舞踊においては〈身ぶり〉が世界を分節し，また世界に分節されることになる。つまり，〈身ぶり〉が世界を分節するとは広義の意味での舞踊譜の問題であり，すでに世界に分節された〈身ぶり〉とは，それぞれの様式の舞踊のなかでの技法の体系，〈動き〉のボキャブラリーの問題として捉えられる。

このような〈身ぶり〉を前提として，〈身ぶり〉の運動的な要素である〈動き〉の分節について考えていきたい。

2　〈動き〉の分節

舞踊の〈意味〉を我々が捉えることができるのは，その〈動き〉が分節かされているからで，舞踊の振付は分節化された〈動き〉を組み立てる作業であり，それを見る我々も，作る立場ではなく，見る立場から〈動き〉の分節を〈動き〉の流れのなかから見つけ出すことである。そうすることによって舞踊の〈意味〉を理解することができる。その〈意味〉とは，身体の〈動き〉を通して舞踊がそこに存在せしむべく意図した世界のことで，市川浩のいう「身による世界の分節化」ということになる。〈見分け〉はいわば認識の問題であったが，それが舞踊においては想像の問題となる。

〈動き〉の分節を構成する振付や，目の前に展開される舞踊から〈動き〉の分節を見出す解釈を記録したものが舞踊譜である。だから舞踊譜には２つの種類があるべきだと思われる。つまり振付者の持つ〈再現の舞踊譜〉と見る者の持つ〈解釈の舞踊譜〉である。いずれの舞踊譜も〈動き〉の分節を無視した舞踊譜であるならば，いくら身体の各部分の〈動き〉を正確に記録したとしても，舞踊譜としては問題があるといわざるを得ない。

3 〈行動としての舞踊〉

舞踊にも様々な種類があり，舞台で行われるとか祭りのなかで行われるといった，舞踊の機能によって〈動き〉の分節が異なる。むしろ〈動き〉の分節の違いが舞踊の機能や様式を決定するといっても良い。現代舞踊の場合には〈動き〉の分節を見出して舞踊譜に記述することが難しく，民俗における舞踊の場合には，〈動き〉の分節をたやすく把握することが可能とはいえる。前者のような〈表現としての舞踊〉における〈動き〉の分節は，イメージによって世界を表現するために働き，後者のような〈行動としての舞踊〉にあっては，例えば神という虚構が自分たちの現実の生活に関わることによって願望を実現するような世界を現出するために〈動き〉の分節が働くことになる。

ここで，もう少し〈行動としての舞踊〉と〈表現としての舞踊〉の違いについて述べると，〈表現としての舞踊〉は，あくまでイメージによって虚なる世界を舞台の上に現出させ，それを見るという体験も，舞踊の行われる時間と空間のなかで完結される。しかし，〈行動としての舞踊〉は，例えば日照りの時に雨乞踊りを踊って龍神の発動を促して，雨の降ることを期待し，農耕作業の支障を採り除くといったように，踊ることが現実の生活の中に結果をもたらす。そこでは，舞踊が〈表現〉に止まることなく，現実の生活にその結果を得ようとする〈行動〉となっている。

舞踊が〈行動〉であるためには，その〈行動〉の目的が実現されるような〈動き〉が用意され，その〈行動〉の目的が実現されるように〈動き〉が組み立てられている。そこには〈動き〉の組立てを，その分節を見出しつつ記述する〈解釈の舞踊譜〉が可能であり，また〈行動〉の目的が実現されるべく用意された〈動き〉のボキャブラリーが技法の体系ということになる。したがって〈行動としての舞踊〉のために用意される〈動き〉のボキャブラリーと〈表現としての舞踊〉のために用意される〈動き〉のボキャブラリーとは，質の違うものである。

〈動き〉のボキャブラリーは，イメージとしての世界にせよ，行動の対象としての世界にせよ，すでにその舞踊の関わり得る世界を限定してしまう。例えば，歌舞伎舞踊の〈動き〉のボキャブラリーで現代を表現しようとすれば，そこに新たなボキャブラリーを追加してボキャブラリーの体系全体を組み替えなければ現代という新しい世界を現出させることは難しい。

〈動き〉の分節は，このようにとりあえず舞踊譜と〈動き〉のボキャブラリーという視点から捉えることができる。〈行動としての舞踊〉において，その〈動き〉の分節をどのような舞踊譜によって捉え得るか，あるいは〈動き〉のボキャブラリーが〈表現としての舞踊〉と比較してどのような特色があるかについては，大会の報告では長野県天龍村の大河内の湯立ての祭りにおける湯ばやしの舞を事例としてビデオによって示したが，それを言葉で述べることは与えられた紙数ではとうてい果たし得ないので，ここでは〈行動としての舞踊〉論の本論に至る前段を述べるにとどめる。

＊1991年度春季第31回舞踊学会
『舞踊學』第14号より転載